

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター 所長

平成 2 4 年度病害虫発生予報第 4 号について
平成 2 4 年度病害虫発生予報第 4 号を発表したので送付します。

平成 2 4 年度病害虫発生予報第 4 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	本文の記 載ページ
普通期水稲	1 葉いもち	並	2
	2 紋枯病	並	2
	3 ツマグロヨコバイ	並	2
	4 セジロウンカ	やや多	2
	5 トビイロウンカ	やや多	2
	6 ヒメトビウンカ	並	3
	7 コブノメイガ	やや少	3
野菜類全般	1 アブラムシ類	並	3
	2 ハスモンヨトウ等のチョウ目（鱗翅目）害虫	やや多	3
果樹全般	1 果樹カメムシ類	-	4
カンキツ (露地栽培)	1 かいよう病	やや多	4
	2 黒点病	やや多	4
	3 ミカンハダニ	やや少	5
	4 チャノキイロアザミウマ	並	5
茶	1 炭疽病	多	5
	2 もち病	多	5
	3 輪斑病	並	5
	4 チャノコカクモンハマキ	並	5
	5 チャハマキ	並	6
	6 チャノホソガ	やや多	7
	7 カンザワハダニ	並	7
	8 チャノキイロアザミウマ	並	7
	9 チャノミドリヒメヨコバイ	並	8
	10クワシロカイガラムシ	並	8

は注意報、 は防除情報を発表

作物の生育状況（7月中旬）

普通期水稲は分けつ期、うんしゅうみかんは果実肥大期、茶は三番茶の摘採前～摘採始めであった。

向こう1か月の気象予報

天気は平年と同様に晴れの日が多く、気温は高い確率40%、降水量は多い確率40%、日照時間は平年並の確率40%と予想されている。

(1か月予報 鹿児島地方気象台7月20日発表)

発生予報の根拠および防除対策

普通期水稲

1 葉いもち（並）

平成24年度病害虫防除情報第5号（6月22日発表）参照

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の巡回調査では発生を認めていない。
(平年：発生面積率12.1%、発病株率3.2%)
- (2) 天気は平年と同様に晴れの日が多く、気温は高い確率40%、降水量は多い確率40%、日照時間は平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 箱施薬剤を施用したほ場であっても、薬剤の効果が切れると発病することがあるので注意する。
- (2) 穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、粉剤または液剤による穂ばらみ後期と穂揃期の防除を徹底する。

2 紋枯病（並）

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年：発生面積率0.4%、発病株率0.0%)
- (2) 天気は平年と同様に晴れの日が多く、気温は高い確率40%、降水量は多い確率40%、日照時間は平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) イネの抵抗性が低下する幼穂形成期から穂ばらみ期にかけて上位葉鞘に進展するので、防除は穂ばらみ期に行い、その後も上位葉鞘への進展が続く場合は2回目の防除を実施する。
- (2) 株が成長して風通しが悪くなると急激に病勢が進展するので、前年多発したほ場では十分注意する。

3 ツマグロヨコバイ（並）

- (1) 7月中旬の発生面積率37.5%（平年33.6%）は平年並、20回すくい取り虫数1.6頭（平年1.4頭）は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 萎縮病、黄萎病を媒介するので注意する。

4 セジロウンカ（やや多）

平成24年度病害虫防除情報第7号（7月10日発表）参照

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の発生面積率95.0%（平年75.1%）、20回すくい取り虫数43.0頭（平年32.8頭）はいずれも平年よりやや多である。
- (2) 都城市の予察灯における7月第1半旬の誘殺数は4524頭と多く、特に7月3日には4310頭の誘殺を確認した。

[防除上の注意]

- (1) 幼穂形成期頃に多発生すると、吸汁による生育抑制、下位茎葉の黄変枯死、出穂の遅れが生じるので、発生状況を見て若齢幼虫期に防除する。
- (2) イネ南方黒すじ萎縮病(仮称)を媒介するので注意する。

5 トビイロウンカ（やや多）

平成24年度病害虫防除情報第7号（7月10日発表）参照

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の発生面積率7.5%（平年4.3%）は平年よりやや多、株当たり虫数0.00頭

(平年0.00頭) は平年並である。

(2) 予察灯調査では、6月第6半旬から断続的な飛来が認められており、7月3日には都城市で17頭の誘殺が確認された。

(3) 向こう1か月の天気は平年と同様に晴れの日が多く、気温は高い確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

(1) 少ない飛来量でもその後の増殖率が高く、坪枯れ等大きな被害が生じるため、長期残効型の箱施薬を行っている場合でもほ場での発生に注意する。(第1世代成虫における要防除密度は、短翅型雌成虫が株当たり0.2頭)

(2) 向こう1か月の気温は高いと予想されており、本虫の増殖が速まり生息密度が高まる恐れがあるので注意が必要である。

(3) 7月3日に飛来したトビイロウンカの第1世代(飛来次世代) 幼虫の防除適期は7月4~5半旬、第2世代幼虫の防除適期は8月3~4半旬と予想されるので、発生状況を確認して防除を行う(平成24年度病害虫防除情報第7号の発生世代予測を参照) 。

6 ヒメトビウンカ(縞葉枯病) (並)

[予報の根拠]

(1) 7月中旬の発生面積率32.5% (平年33.7%)、20回すくい取り虫数1.4頭(平年1.3頭) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

(1) 本虫は縞葉枯病を媒介し、近年九州管内において、その保毒虫率が高まっている。

7 コブノメイガ (やや少)

[予報の根拠]

(1) 7月中旬の巡回調査では発生未確認である。

(平年 : 発生面積率19.3%、被害葉率0.2%)

(2) 県内3か所(都城市・えびの市・宮崎市佐土原町) のライトトラップ調査では、えびの市において6月29日に確認された。また、宮崎市佐土原町と都城市に設置しフェロモントラップでは、7月第1半旬以降断続的な飛来が確認されている。

[防除上の注意]

(1) 防除適期は、粒剤を使用する場合は発蛾最盛期、粉剤及び水和剤等を使用する場合は幼虫ふ化期(発蛾最盛期の7日後) であるので、ほ場での発生状況を把握し適期防除に努める。

野菜類全般

1 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

(1) 黄色水盤トラップ(宮崎市佐土原町) による誘殺数は平年並で推移している。

[防除上の注意]

(1) 作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

2 ハスモンヨトウ等のチョウ目(鱗翅目) 害虫 (やや多)

[予報の根拠]

(1) ハスモンヨトウのフェロモントラップ(宮崎市佐土原町、国富町、都城市、西都市) での誘殺数は、国富町及び西都市での誘殺が7月中旬に多くなっている。

(2) 西都市におけるタバコガ、オオタバコガのフェロモントラップ調査では、タバコガは平年並、オオタバコガは平年より少ない誘殺数である。

[防除上の注意]

(1) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を徹底する。

果樹全般

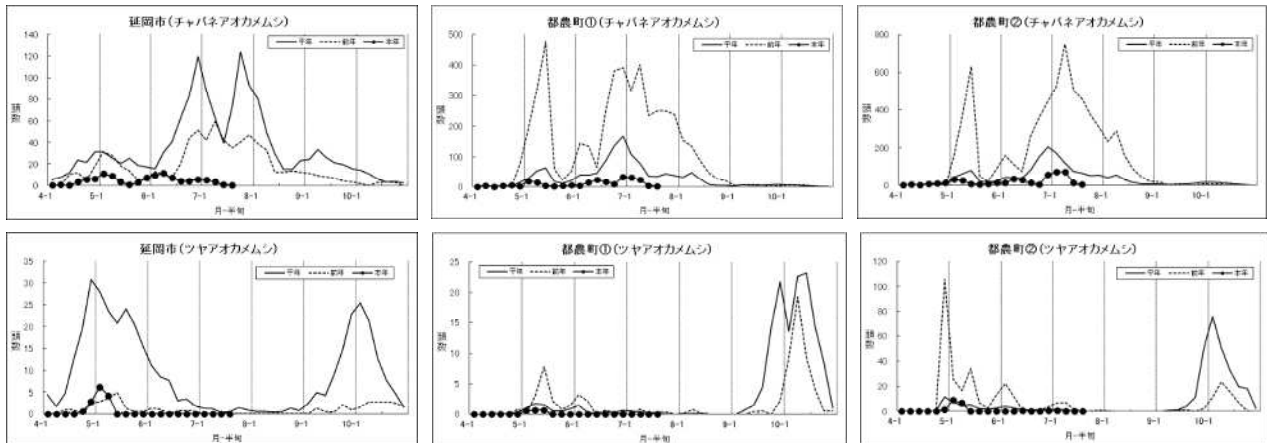
1 果樹カメムシ類

[予報の根拠]

(1) 県内3か所 (延岡、都農、都農) に設置したフェロモントラップ調査では、平年より少ない誘殺数で推移している。

[防除上の注意]

- (1) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努める。
- (2) 台風が襲来した場合は、カメムシが餌としているヒノキやスギの毬果が落果し、果樹園に大量飛来するおそれがあるので、注意が必要である。



カンキツ (露地栽培)

1 かいよう病 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 7月中旬の巡回調査における春葉調査では、発生面積率16.7% (平年25.5%) は平年並、発病度0.7 (平年0.5) は平年よりやや多である。

(2) 果実調査では、発生面積率16.7% (平年14.4%) は平年並、発病度0.4% (平年0.2%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 発病した枝葉は、伝染源となるので可能な限り取り除き、園外に持ち出し適切に処理する。
- (2) 強風による枝葉の損傷を少なくするため防風垣等を整備する。特に台風の襲来が予想される時は、事前に薬剤散布を行う。
- (3) ミカンハモグリガの被害は、格好の病原菌侵入口となるので、夏秋梢の発生の多いほ場ではハモグリガの防除を徹底する。

2 黒点病 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 7月中旬の果実調査では、発生面積率33.3% (平年19.8%)、発病度2.1% (平年0.9%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 感染源となる枯枝は、可能な限り取り除く。
- (2) 剪定枝をそのままほ場周辺に放置していると激発するおそれがあるので、埋設する等適切に処理する。
- (3) 防除間隔の目安は積算降水量300mmで、降水量が少ない場合でも1か月後には次の

防除が必要である。

3 ミカンハダニ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の発生面積率5.6% (平年31.2%)、寄生葉率0.1% (平年4.4%) はいずれも平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 高温・乾燥状態で生息密度が高まる。
(2) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5~1頭を目安に防除を行う。

4 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の巡回調査では未確認である。
(平年：発生面積率6.0%、寄生果率0.3%)

[防除上の注意]

- (1) 密度が高くなると防除が困難になるので、1果当たり虫数0.3頭を目安に防除を行う。
(2) 防風垣にイヌマキが植栽されているほ場では、その新芽にも寄生するので防除に努める。

茶

1 炭疽病 (多)

平成24年度病害虫発生予察注意報第2号 (6月26日発表) 参照

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の巡回調査における発生面積率88.2% (平年59.8%)、 m^2 当り病葉数78.7葉 (平年5.1葉) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 新芽の生育期に雨が多いと発生しやすい。防除は秋芽の萌芽~1葉期に予防効果のある剤を散布し、その後、2~3葉期に治療効果のある剤を散布する。

2 もち病 (多)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の発生面積率23.5% (平年11.6%)、 m^2 当り病葉数16.5葉 (平年0.6葉) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 秋芽に発病すると次年度の新芽への影響が大きいため、防除は秋芽の萌芽~1葉期に実施し、秋芽への感染を防ぐ。
(2) 防除適期が炭疽病と同じであるため同時に防除する。

3 輪斑病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の発生面積率5.9% (平年10.9%)、 m^2 当り病葉数0.2葉 (平年0.5葉) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 摘採・整枝直後の傷口から感染するので、作業後なるべく早く防除を行う。
(2) 多発園では新梢枯死症の発生が懸念されるので、秋芽開葉期にも防除を行う。

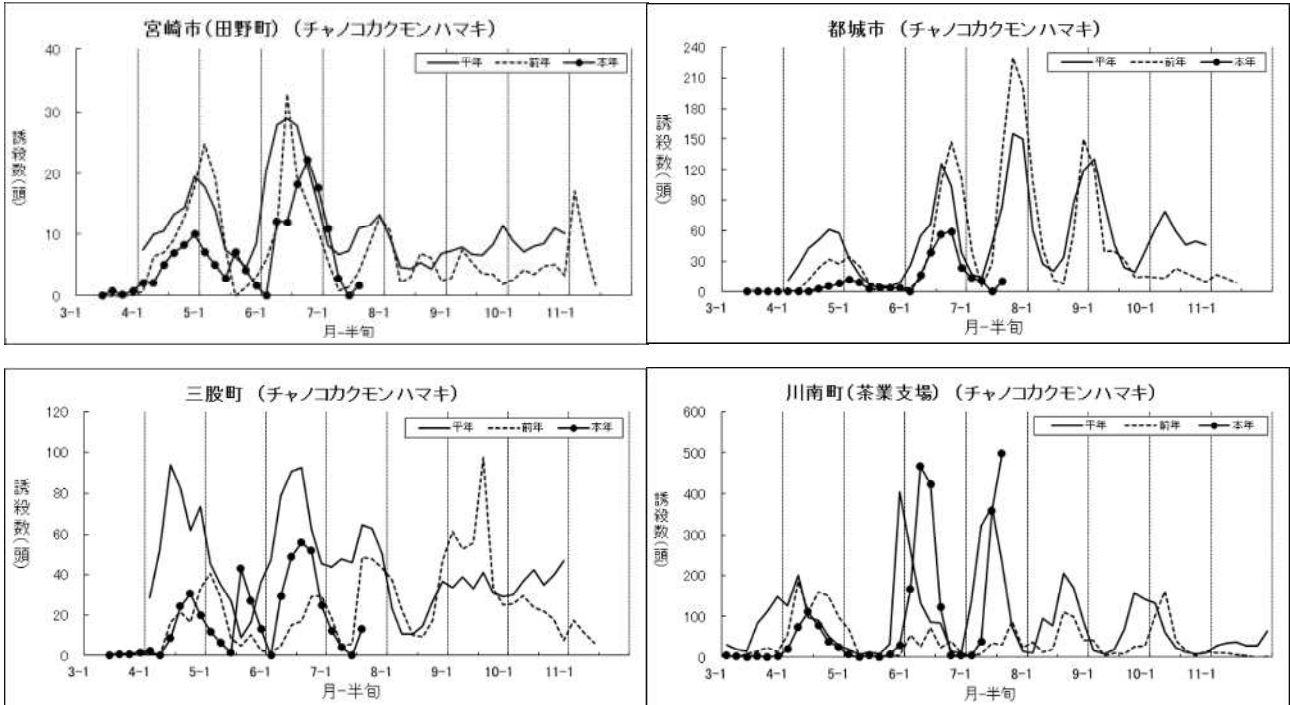
3 チャノコカクモンハマキ (並)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の巡回調査では、17ほ場のうち2ほ場で微発生^(注) (m^2 当り虫数0.5頭未満)が確認されている。
(平年：発生面積4.1%、 m^2 当り虫数0.1頭)

[防除上の注意]

- (1) 県内4か所(宮崎市田野町、都城市、三股町、川南町)に設置しているフェロモントラップ調査では、次回の発蛾最盛期は、7月末～8月始めと予想される。
- (2) 発蛾最盛期の7～10日後が防除適期である。



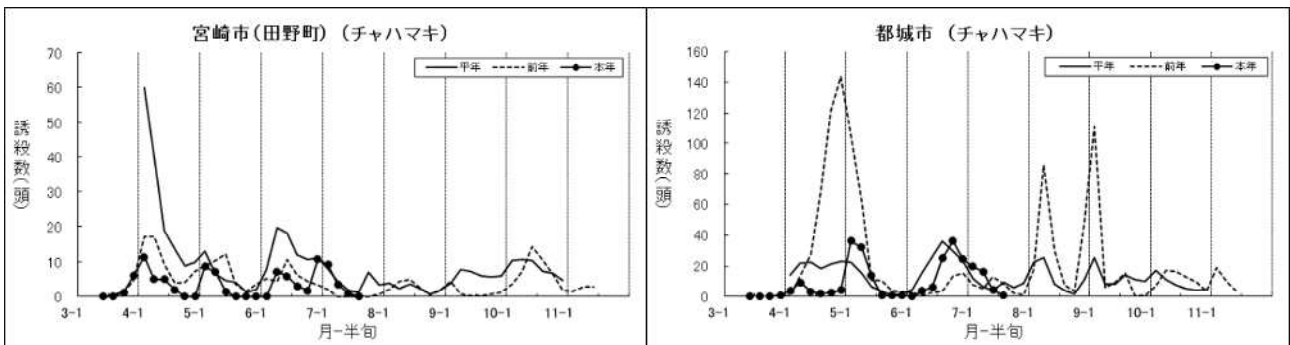
4 チャハマキ (並)

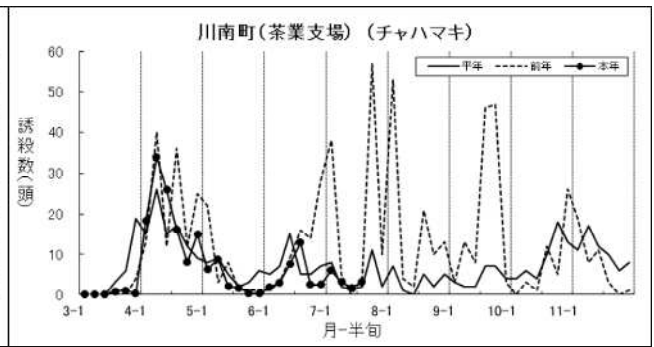
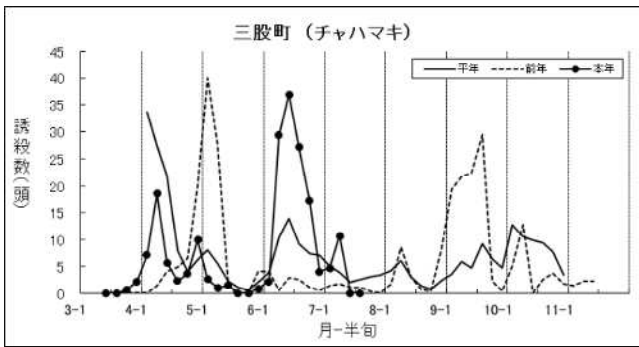
[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の発生面積5.9% (平年7.7%)、 m^2 当たり虫数0.1頭(平年0.3頭)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) フェロモントラップ調査では、次回の発蛾最盛期は8月上旬と予想される。
- (2) 発蛾最盛期の7～10日後が防除適期である。





5 チャノホソガ (やや多)

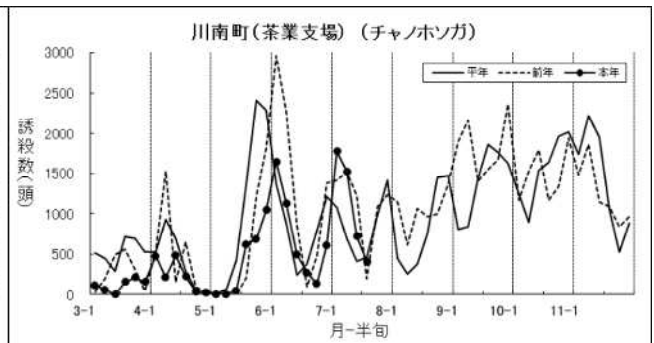
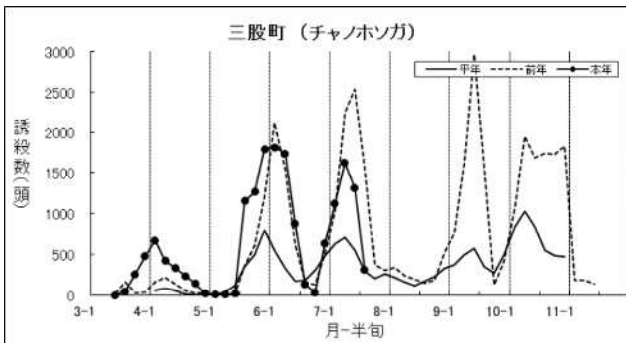
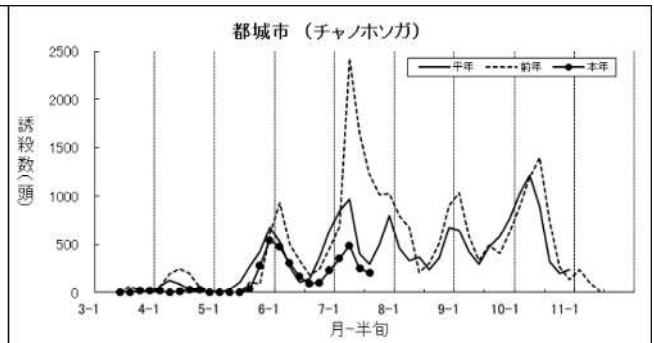
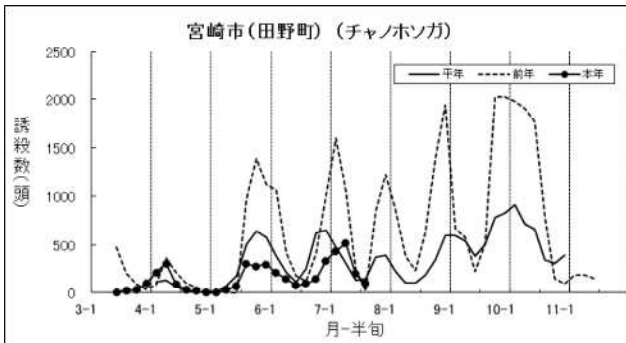
[予報の根拠]

(1) 7月中旬の発生面積29.4% (平年29.6%) は平年並、 m^2 当たり巻葉数1.9頭 (平年0.6頭) は平年より多である。

[防除上の注意]

(1) フェロモントラップ調査では、次の発蛾最盛期は8月上旬と考えられる。

(2) 発蛾最盛期の10日後が防除適期である。



6 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

(1) 7月中旬の発生面積率5.9% (平年15.5%)、寄生葉率0.2% (平年1.3%) はいずれも平年よりやや少である。

(2) 天気は平年と同様に晴れの日が多く、気温は高い確率40%、降水量は多い確率40%、日照時間は平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

(1) 同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤の口 - テ - ション散布を実施する。

7 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

(1) 7月中旬の見取り調査による発生面積率47.1% (平年57.3%) は平年よりやや少、寄生葉率3.3% (平年4.6%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) この時期は卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくく防除効果があがらないので、残効の長い薬剤が1週間間隔での連続散布を行う。

8 チャノミドリヒメヨコバイ (並)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の見取り調査による発生面積率58.9% (平年48.4%) は平年よりやや多、寄生葉率3.8% (平年4.7%) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) チャノキイロアザミウマとの同時防除とする。

9 クワシロカイガラムシ (並)

[予報の根拠]

- (1) 7月中旬の発生面積率5.9% (平年16.3%)、寄生株率0.6% (平年4.0%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は幼虫ふ化開始から1週間後、または幼虫ふ化最盛期の2~3日であるので、ふ化状況をよく観察して防除する。
(2) 薬剤散布量は、成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布する。

(注) 微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

農薬危被害防止運動

6月1日から8月31日は、農薬危被害防止運動月間です。農薬散布にあたっては、ラベル表示の確認を十分に行い、農薬使用基準を遵守し、危被害防止に努めましょう。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

宮崎県農薬安全使用啓発ホームページ

<http://nouyaku-tekisei.pref.miyazaki.lg.jp/nouyaku/user/top/miyazaki>

日本植物防疫協会ホームページ

<http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ

<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センターホームページ

<http://www.acis.famic.go.jp/>

- 2 農薬の使用にあたっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。

- 3 発生量(程度)の区分

多	い	(高	い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多	い	(やや高	い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少	ない	(やや低	い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少	ない	(低	い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 (平年値は過去10年間の平均)

- 4 予察情報の種類

病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- (1) 予 報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
(2) 注 意 報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
(3) 警 報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。

- (4) 特 殊 報 . . . 県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
- (5) 防除情報 . . . 注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。ホームページアドレスは<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【 文書取扱 】

病害虫防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127

E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp